

青
あおおに
鬼
ク
調査
7

怪物を従えた少女と激突せよ！

ノプロプス・黒田研二 / 原作

波摘 / 著

鈴羅木かりん / イラスト

優助

北部小学校の五年生。

レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サツカークラブに入っているが、オカルト調査クラブのメンバーとしても活動している。

レイカ

レイカは北部小学校の五年生。オカルト調査クラブ部長。学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことでないと周囲が見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

スズナ

スズナは北部小学校の四年生。オカルト調査クラブのメンバー。夜の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルト調査クラブに入ることを決意。レイカになついている。





たまちゃん

ひとだまのような青い炎を放ち、宙に浮かぶ。レイカたちに協力的だが、その不思議な力を使うためには、大きな代償を支払う必要がある。



知香

二十年前、家族でまほろば遊園地を訪れた際に事件に巻きこまれ、青鬼の「王種」となった少年。二十年間、「地下の王」として遊園地の地下で孤独に過ごしていた。今はレイカたちと協力関係にある。

魔尾町現情(デンノウ)――

オカルトを中心に研究している民俗学者。青鬼に強い関心を抱いており、夏休み明けから北部小学校・オカルト調査クラブの顧問となった。

ひろし

北部小学校の五年生。この夏、様々な場所で見鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。



タケル

ピジョン・フリーゼという種類の犬。人間の言葉をすべて理解しているが、バレルと面倒なので秘密にしている。



クロさん

レイカたちがまほろば遊園地を調査している最中に会った男性。青鬼に詳しいが、危険人物のようだ。



ハルナ先生

レイカたちやひろしが通う北部小学校の教師。クロさんの裏切りによって心に深い傷を負い、現在、学校を休んでいる。



青

あおおに

白

鬼

ク

ラ

ズ

調

査

碧奥天文台の見取り図	006
ウワサ調査リスト	008
1 ひろし君との情報交換	009
2 ゲンノウさんの挑戦	018
3 ウワサ調査リスト	029
4 『少女と巨人』	046
5 碧奥天文台	052
6 悪夢開幕	063
7 真っ黒な敵意	087
8 二人きりのロビー	094
9 悪趣味な上映会	102
10 惑星の降る夜	111
11 正真正銘のパケモノ	129
12 そんなオカルトはひどくつまらない。	153
13 王をナメるな	170
14 別れの言葉は届かない	183
目を覚ました	
オカルト調査クラブメンバーの会話	189
碧奥天文台の見取り図 その2	190

ぼうえんきょう
きぼう望遠鏡
かんそくしつ
観測室

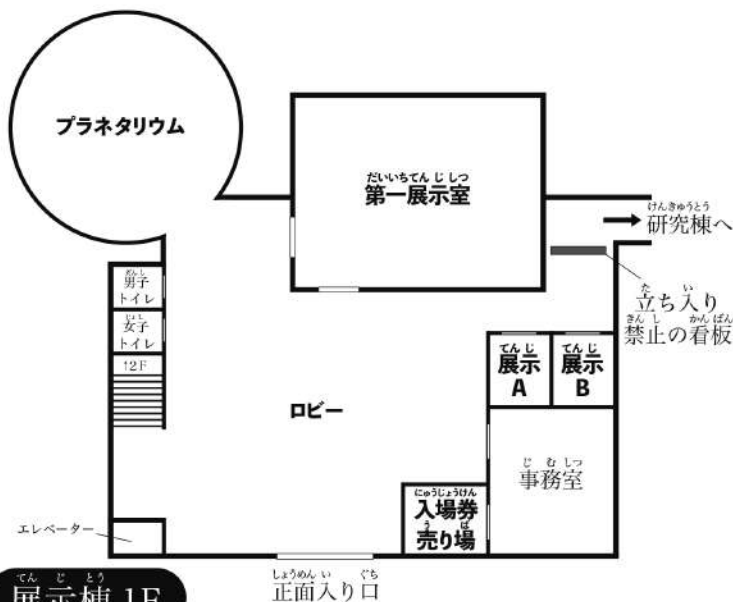
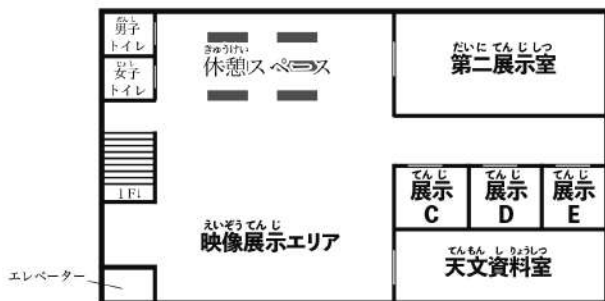
けん きゅう とう
研究棟 2F



けん きゅう とう
研究棟 1F

み と ず
へき お てん もん だい
碧奥天文台の**見取り図**

てん じ と う
展示棟 2F



てん じ と う
展示棟 1F

ウワサちよう調さ査リスト

● 少女しょうじょと巨人きょじん

● 碧奥市へきおしの飛行物体ひこうぶつたい

● 墓地ぼちに住む子どもすこ

● 路地裏ろじうらの叫び声さけごえ

● ビルからただよう異臭いしゆう

● 廃校はいこうと幽霊ゆうれい

● 深夜しんやに現れる大量あらわの黒い影たいりよう くるかげ

MEMO

1 ひろし君との情報交換

くがっこうあか ほうかご
九月九日。放課後。

ほくぶしがっこう
北部小学校、オカルト調査クラブの部屋。

へや なか
部屋の中では、わたしともう一人が対面していた。

わたしは窓を背にして椅子に座り、もう一人は入り口近くの椅子に冷静な表情で座っている。

ほか ちよき
他の調査クラブのみんなには、校内で時間をつぶしてもらっていた。

ぜんいんがぶしつあつ
全員が部屋に集まってしまうと、目の前の彼を数人で囲む形になってしまう。それだと彼の居

ごこち
心地が悪くなるかもしれないからだ。

……まあ、彼はそんなことを気にする人ではないと思っっているけれど。

しず
静かな雰囲気の中、わたしは口を開いた。

「いきなり呼び出してごめんなさい——ひろし君」

そう。今、わたしと向かい合っているのはひろし君だった。

「いえ。僕もレイカさんの話に興味がありましたから。今日はブルーベリー色の怪物についての

情報交換が目的ということでもよろしいですね？」

わたしはこくりとうなずく。

ひろし君やその友達が、複数の場所で青鬼に遭遇したことは知っている。その詳細を聞いておきたかった。

一方でオカルト調査クラブも、青鬼関係の新しい情報をたくさん手に入れていた。

八月の中旬、わたしと優助はジェイルハウスに潜入する前に、ひろし君と青鬼について話したが、あの頃とはだいぶ状況が変わっていた。

そのうちひろし君と情報交換する必要があるとは思っていた。青鬼との戦闘などが続いたせいで、今日まで先のばしになっていただけだ。

——だけと。

そろそろ、ちゃんと話をするべきだと思つた出来事がついこないだあつた。

まほろば遊園地でのことだ。

『地下の王』との最終決戦前、遊園地のマスコットキャラクターであるマホロバちゃんの着ぐるみを着たたけし君と出会つた。

その後、数人の小学生らしき人影も見かけている。



もしあれがひろし君たちだったとしたら、
彼らはわたしの予想よりもずっと、青鬼との
関係が深い可能性がある。

その辺りをしっかりと確かめておきたいとい
う考えもあって、ひろし君を部室に呼んでじ
つくり話をするに決めたのだ。

「今朝渡した調査レポートには目を通してく
れたかしら？」

ひろし君には特別な調査レポートを作っ
て、事前に渡しておいた。

今までの青鬼との戦いを中心にまとめつつ
も、たまちゃんのことや優助が青鬼化できる
こと、また《王種》に関する情報は伏せて
ある。

……ひろし君にはまだ隠しておいたほうが

いいと思つたからだ。

きつとそれらの情報を教えても、ひろし君なら理解してくれるだろう。

だけでもし、「たまちちゃんや優助は危険な存在だ」と思われてしまつたら、今後の協力関係に影響が出る。それはなるべく避けたかつた。

「いただいた資料は休み時間にすべて読み終えました。ジェイルハウス、北部小学校、碧奥港に青島、碧奥美術館。そしてまほろば遊園地——これだけの場所であるブルーベリー色の怪物と戦

つたというのは、なかなか信じがたい話ですね」

ひろし君は表情を変えずにそう言つた。

わたしもすぐに信じてもらえらると思つていない。

ジェイルハウスで青鬼と遭遇してから、まだ二カ月しか経っていないことを考えると、わたしたちが青鬼と戦つた回数は多すぎだ。

ひろし君はわたしをまつすぐ見つめて続ける。

「信じがたい話——ですが、僕はレイカさんを信じようと思つています」

思わぬ言葉にわたしはほかんと口を開けた。

「え、信じてくれるの？ 証拠もないのに？」

「はい。……もちろん、僕がレイカさんの言葉を信じる理由はちゃんと存在します」
「理由？」

「ジェイルハウス、碧奥小学校、碧奥医院、青島、まほろば遊園地」

ひろし君は淡々と場所の名前をあげていく。

碧奥小学校と碧奥医院以外は、調査クラブが青鬼と遭遇した場所と同じだ。

そしてわたしは思い出す。ひろし君の友達、卓郎君と美香ちゃんがサッカークラブの練習試合で北部小学校にやってきた時のことを。

——二人は「碧奥小学校」、「碧奥医院」でも怪物に襲われたと言っていた。

「ひろし君……もしかして今、名前をあげた場所って」

わたしが何を考えているのか理解しているように、ひろし君は小さくうなずいた。

「そうです。僕やタケル君たちがこの二カ月であの化け物——レイカさんが『青鬼』と呼ぶブルーベリー色の怪物に襲われた場所です」

「ひろし君たちも、そんなにたくさん青鬼と遭遇していたの!？」

驚くべき事実だった。調査クラブのメンバー以外にも、何度も青鬼に襲われている人たちがいたなんて。

「僕たちとレイカさんたちが青鬼と遭遇した場所は三か所もかぶっています。レイカさんの調査レポートがもしデタラメだったなら、ここまで一致することはないでしょう」

「たしかにそうね。……ひろし君。渡した調査レポートには詳しく書かなかつたけれど、わたしはまほろば遊園地であなたたちと思われる人影を見たわ。九月四日の深夜のことよ。なにか急いでいるみたいだった。あの時、遊園地には料理人の青鬼やクロさんと名乗る人がいたはず。それもあなたたちと何か関係がある？」

ひろし君はようやく納得がいったように、ほんの少しだけまゆを動かした。

「なるほど。なぜレイカさんがこのタイピングで僕を呼び出したのか、疑問に思っていました。……あの日、レイカさんたちもまほろば遊園地にいたんですね。奇妙な偶然です。しかし、クロさんのことを知っているのなら話が早い」

そうして、ひろし君は語りだした。

クロさんはひろし君たちの因縁の相手であり、敵だということ。

あの日はクロさんに連れ去られたハルナ先生を助けるために、まほろば遊園地に行ったのだということ。

「クロさんがハルナ先生を連れ去っていたなんて……。そうと知っていたら、絶対に逃がさなか

ったのに」

わたしはため息をつき、頭を手で押さえる。

ハルナ先生はわたしのクラスの担任の先生だ。

先生を危険な目にあわせるなんて許せない。

青鬼に指示を出せる時点でクロさんが危険な人物だということはわかっていたが、そこまでひ

どいことをする人だったとは。

これからはオカルト調査クラブも、クロさんを要注意人物として警戒しないとイケない。

また、ひろし君の話のおかげで一つ気になっていたことが解決した。

「……だからハルナ先生はここ二日学校を休んでいるのね。先生が休むのは珍しいなと思ってい

たけれど」

ハルナ先生が休んでしまったため、今は別の先生たちがわたしたちのクラスを見てくれている。

る。

だけどやっぱりハルナ先生じゃないときびしい。

「ハルナ先生はズいぶんショックを受けてしまったようです。しばらくは学校に来られないかもしれませぬ」

そう言ったひろし君の顔には、ほんの少し悔しそうな感情が浮かんでいた。

だがすぐに、すつといつもの涼しげな表情に戻る。

ひろし君は話を続けた。

「オカルト調査クラブが青鬼と戦ってきたことはわかりました。それでは、もつと詳しい情報交換を始めましょう。あのブルーベリー色の怪物はどのような存在なのか。少しでも情報を集めておきたいところです」

その後、わたしとひろし君は一時間ほど、青鬼について語りあった。

ひろし君たちも青鬼相手になかなり大変な思いをしてきたようだ。

わたしも今までの青鬼との戦いのことを詳しく話していく。

ただ、ひろし君に渡した調査レポートでも伏せていたように、優助が青鬼になれることやたまちゃんのこと、《王種》については隠したままだ。

ひろし君のことは信用している。

でも、調査クラブのメンバーではない人間にこの秘密を話して、優助やたまちゃんが危険にさらされるリスクを負うことはやつぱりできなかつた。

——ごめん、ひろし君。

心こころの中なかでひろし君くんに謝あやまる。

一通り話はなしを終おえたわたしたちはこれから情報交換じょうほうこうかんすることを約束やくそくし、その日ひは解散かいさんすることとなった。

2 ゲンノウさんの挑戦

「話は終わったかね、レイカ君？」

ひろし君が調査クラブの部室を去った数分後。

ガタガタとそうぞうしい音を立てて、ゲンノウさんが部室に入ってきた。

なにやら大きな段ボール箱を抱えている。

かなり重いようで、ゲンノウさんは「ハアハア……」とつらそうに呼吸をしていた。早足で部

室の中央までやってくると、抱えていた箱をドスツ！と床に置く。

「なんですか、その荷物？」

「気になるかい？ 実は前からオカルト研究活動の幅を広げようと考えていてね。この中にはそ

のために必要な機材が入っているのだよ」

「はあ、そうですか」

額に浮かんでいた汗をぬぐったゲンノウさんは持つてきた箱を開けて、ごそごそと中をあさり出す。

わたしがその様子ようすを椅子いすに座すわつたまま、眺ながめていると背後はいごから声こゑがした。

「レイカ、ひろしとの情報交換じょうほうこうかんは無事ぶじに終わおつたか？」

「……ゲンノウさんは何をなにをやっているんですか？」

振り向ふりむくと、優助ゆうすけとスズナちゃんが廊下ろうかから室内しつぱいをのぞきこんでいた。そろそろひろし君くんが帰かえつた頃ころだと判断はんだんして戻もどつてきたみたいだ。

「校内こうがいで時間じかんつぶしをさせてごめんね。情報交換じょうほうこうかんはもう終わおつたから、入はいつてきて大丈夫だいじょうぶよ」

わたしがそう告つげると、二人ふたりとも部屋ふしつに入はいつてきた。

優助ゆうすけは空あいている席せきに座すわり、スズナちゃんは箱はこの前まえでかがんでいるゲンノウさんの様子ようすをチェックちくしにいく。

「ゲンノウさん、部屋ふしつで怪あやしげなことをするのはやめてください。他ほかのみんなに迷惑めいわくがかりますから」

スズナちゃんは疑うたがいのこもつた目めでゲンノウさんを見る。どうやらスズナちゃんは、ゲンノウさんが起おこす行動こうどうすべてが怪あやしいものだと思おもっているようだ。

そして、それはあながち間違まちがいじゃない。

スズナちゃんがしつかりとチェックしてくれるなら安心あんしんできる。



ここは任せておこう。

わたしがそう思った時、箱の中に視線を向けたスズナちゃんがびつくりしたように声を出した。

「これは……！」

「驚いたかね？」

ゲンノウさんは得意げな様子で箱の中から、いくつかの物を取り出して机の上に置いていく。初めに現れたのはノートパソコン。

その次に出てきたのは、パソコンに取りつけられる小型ウェブカメラ。

そしてカラオケにあるようなマイクと、そのマイクを固定するための卓上スタンドが置かれた。

「これからの時代、本を執筆するだけでは、オカルト情報をなかなか世に広められないと思つてね。親友を頼つて高性能な機材一式をそろえてもらったのさ。それなりに値段もしたが……必要なら出費だつたと思ふことにした」

目の前の機材を見て、ゲンノウさんが何を始めようとしているのか、わたしにもなんとなくわかつてきた。

それはそれとして、何かが引つかかる。

さっきのゲンノウさんの話の中に、妙な単語が交ざっていたような……。

——あ。

「ゲンノウさんって、親友いたんですか!？」